

「わかりやすさ」に全力で取り組むまで

これまでの職業人生の中で、私はずっと「どうすればわかりやすくなるか」ということを考えてきました。しかし、もしテレビに出るようになれば、おそらく「わかりやすさ」の重要性に気づくことはなかったでしょう。

元号が平成に変わった直後のことでした。上司から突然、NHKの首都圏向けニュースのキャスターを担当するように命じられたのです。それまでずっと報道局社会部の記者として現場を駆け回っていた私は、思わぬ異動に驚きました。

今でこそ、記者がテレビに出てしゃべることはあたりまえになっていますが、当時はまだ、画面に出るのはアナウンサーの仕事で、記者は裏方という意識が強く残っていました。しかし、結果的にこのときの経験が「わかりやすさ」に開眼するきっかけとなったのですから、人生わからないものです。

突然テレビカメラの前で原稿を読めと言われても、それまで経験がありません。準備のため、試しに首都圏向けのニュース原稿を読んでもみました。驚きました。

まず、文章が長くて息継ぎができません。プロのアナウンサーならスムーズに読めるでしょうが、アナウンス研修を受けたこともない私には、長い原稿を読むための上手な息継ぎができません。しかも難しい言い回しが使われています。自分が記者として原稿を書いていたときは、「視聴者は、これでわかるだろう」と勝手に思っていました。いざ読む側に回ってはじめて、「ああ、これまでずいぶんわかりにくい原稿を書いていたんだなあ」と気づきました。

ニュース番組は生放送です。番組が始まるぎりぎりに、わかりにくい原稿が飛び込んでくることもしばしば。そのたびに冷や汗をかき、改めて「これを平気な顔で読んで、視聴者にわかったと思わせるアナウンサーの技術はすごい」と感心してしまいました。

ずっと記者として仕事をしてきた私は、アナウンサーの初歩である発声練習の訓練さえ独学で身につけなければなりませんでした。ましてや、わかりにくい原稿をわかった気にさせるように読むなんて、とても無理です。何より、読んでいる方が「わかりにくいなあ」と思うような原稿をそのまま読んで、視聴者に内容が伝わるわけがありません。

そこで、記者が書いてきたニュース原稿に手を入れ、わかりやすいものになるまで、徹

底的に直すことにしました。幸い、社内的にもその権限を持った立場でしたので、まず息継ぎができないほど長い文章はどんどん短く切っていったのです。すると、読みやすくなっただけではなく、文章自体も格段にわかりやすくなりました。

また、下読みの段階でわかりにくい原稿は、その場で書き直しです。直そうにも意味が不明な原稿もあるので、「これではわからない」と文句を言ったら、「わからないのは、おまえが馬鹿だからだ」と反論されたこともあります。このときは、「私が意味がわからないまま原稿を読んでも視聴者がわかるはずがないでしょう」と言い返しました。

それ以後も、「これではわからない」「難しすぎる」としつこく言い続けていたら、やがて「池上がうるさいから、わかりやすく直そう」と、原稿をチェックするデスク（管理職）の意識が変わってきました。

しかし、日々のニュース番組では、原稿に事前に手を入れられる機会はそう多くはありません。「図や模型を使えば、もっとわかりやすく伝えることができるのに」と思いながらも、そんな準備をする時間など夢のまた夢でした。

キャスターを務めて五年が経った頃、今度は「新しく始まる『週刊こどもニュース』の

キャスター（お父さん役）をするように」という上司命令が下りました。実は、取材の現場に戻りたくてしかたがなかった私は「キャスターを辞めさせてくれ」と何度も懇願し、「そろそろ記者に戻ってよい」という内示を受けていたところだったのです。「話が違う」と驚いたものの、「『ごどもニュース』なら、一週間かけて今までやりたくてもできなかった図や模型を準備し、存分にわかりやすい解説ができる」と考え直しました。そのときから、全力で「わかりやすさ」に取り組む日々が始まったのです。

視聴者は「小学五年生」

「週刊ごどもニュース」の視聴者として対象にしたのは、小学五年生以上の子どもたちです。なぜ「小学五年生」かといえば、ちょうどこれぐらいの年齢から抽象的な概念が理解できるようになるからです。彼らを一人前に扱い、けっして子どもだましの解説はしないと、まず心に決めました。

一回目の放送で取り上げたのは「高速増殖炉『もんじゅ』」、二回目は「脳死と植物状態の違い」です。大人でも難しいこれらのニュースを小学五年生に「わかった!」と言って

もらうには、そのニュースの本質、つまり、ここがわかったら目からウロコが落ちるとい
うポイントを、わかりやすく伝えなければなりません。「このニュースの本質は何か」「ど
んな図や模型にすれば伝わるだろうか」と、一週間、昼も夜も知恵を絞り続けました。

延々と考えても思いつかないときは、あきらめて風呂に入り、湯船に浸かった瞬間にひ
らめいて、「メモしなければ！」と飛び出すようなこともよくありました。まさに、風呂
に入っている間に「アルキメデスの原理」を思いついた古代ギリシャの数学者アルキメデ
ス状態です。

一方で、子どもたちの素朴な疑問に答えられることもたくさんありました。たとえば、
バブル崩壊後の金融危機の頃、番組に出演していた子どもたちは「どうして、銀行にお金
がないの？」と首をかしげていました。彼らは、銀行は私たちが預けたお金を大事に金庫
にしまっていると思っており、そのお金がさまざまに融資に使われていることを知らな
かったのです。それでは、取り付け騒ぎが起ころのを理解できないのも当然で、金融危機を
説明するにはまず銀行の仕組みから始めなければならぬ、ということに気づかされまし
た。

実は、子どもだけではなく、「銀行は預けたお金を金庫に保管している」と思っている大学生に出会ったことがあります。「そんなこと、常識だろう」というのは、こちらの勝手な思い込みです。世の中の多くの人にとっては「知らない」のがあたりまえかもしれないのです。

ニュースを伝える側は、そのニュースに関してよく知っているので、しばしば、視聴者が「そんなことも知らない」とは気づかないまま伝えてしまいます。けれども、初歩的な部分が抜け落ちたままのニュースをいくら流されたとしても、視聴者は「難しくて、よくわからない」となってしまいうでしょう。「よくわかった」と言ってもらうためには、「そんなことも知らないのか」と馬鹿にするのではなく、「そこから説明しなければならぬのか」という部分から丁寧に解説することが大事なのです。

結局、「週刊こどもニュース」の「お父さん」を一年間担当しました。おかげで、私の頭の中には「小学五年生の池上くん」が今でも住み着いています。NHKを辞めてフリーランスになってからも、この「池上くん」が、「それじゃわからないよ」といつも教えてくれるので、とても助かっているのです。

生放送で気づかされた一言

それでもときどき、無意識のうちに「これぐらい、常識だろう」と思っていた自分に気づかされて、はっとすることがあります。

二〇一八年四月、イギリス、アメリカ、フランスがシリアの化学兵器関連施設を空爆したというニュースが飛び込んできたときのことです。シリアのアサド政権が反対派の住民に対して化学兵器で攻撃したことから、その行為への警告として、三ヶ国がシリア政府の施設を攻撃したのです。

ちょうどテレビ朝日系列で二週間に一回のレギュラー番組が放送されるタイミングだったので、急遽、放送時間の半分を生放送に切り替え、出演していたゲストたちにこのニュースの解説をすることにしました。

すると、ひとりの若い出演者が「どうしてシリアの内戦が始まったんですか？」と聞いてきました。「ああ、そもそもそこから説明しないといけませんでしたね」とうなずいた私は、「二〇一〇年の『アラブの春』で……」と話し始めました。その途端、「すみません、

『アラブの春』って、なんですか？」と言われてしまったのです。

生放送ですから、このやりとりには台本はありません。つまり、この「『アラブの春』って、なんですか？」は、ごく自然な反応だったわけです。「あんなに大きなニュースだったのに、大人がそんなことを聞くのか」と一瞬、驚きましたが、考えてみれば、「アラブの春」が起こったのは八年も前のこと。つまり、今、二〇歳の人はまだ小学生だったと思えば、二〇歳そこそこの出演者が知らないというのも当然です。

シリアの内戦について説明するときは、なんとなく「アサド政権と反政府勢力の戦い」などと簡単にまとめてしまいがちです。けれども、視聴者、特に若い人は、「反政府勢力」がどのような事情でアサド政権に反対するようになったのかを知らない。そのことに「『アラブの春』って、なんですか？」という一言で気づかされました。

こんな素朴な疑問は、いつでも大歓迎です。私自身、非常に勉強になりました。

ニュース解説は視聴率がとれる

私が民放でこうしたニュース解説の番組を担当するようになったそもそもの始まりは、

NHKを辞めてフリーになってから出演していたある番組が、視聴率がとれなくて打ち切り寸前になっていたことがきっかけでした。当初、出演依頼を受けたときは、「過去の大きな事件や事故を取り上げるので、ビデオの後、スタジオで解説してください」とのことでした。

ところが、視聴率が下がり始めますと、お取り寄せグルメやペット大集合のようなものを特集するようになります。当初の約束と違います。うんざりした私はその番組を降りることにしたのです。すると、「ちゃんとニュースを取り上げることにしますから、戻ってきてください」と、テレビ局が頼みに来ました。

ではどんなニュースがいいだろうかと考えたとき、ぴったりだと思ったのは、二〇〇九年のイラン大統領選の話題でした。その頃、イランでアフマディネジャド大統領の再選をめぐって、学生たちが猛反発し、大混乱が起こっていたからです。しかし、日々のニュースで伝えられるのは、「イランの大統領選挙後、国内が混乱している」という事実だけ。なぜそういうことになっているのかという背景はまったくわかりません。イランの大統領選挙の仕組みも解説しません。そこで、「イランについて、一から解説しましょう」と提

案を出したのですが、スタッフは乗り気ではありません。「ゴールデンタイムの時間帯に難しい国際ニュースなんてやっても、誰も見ませんよ」というわけです。

結局、「どうせ打ち切りは決まっているんだから、何をやっても同じだ」ということで、私の提案どおり、イランの大統領選を解説することに決まりました。ところが、これがスタッフの予想に反して、前の週の倍の視聴率を獲得したのです。

番組の打ち切り自体はすでに決定していたものの、放送が終了するまで数週間が残っていました。そこで、この勢いで複雑な国際情勢や政治ニュースをどんどん取り上げていきました。それらがいずれも高い視聴率をとるにつれ、「どうせ難しい国際ニュースなんて見ませんよ」と疑わしげだった制作スタッフの目の色も次第に変わっていったのです。

今、さまざまな番組でニュースを「わかりやすく」解説していますが、「難しい国際ニュースなんて見ませんよ」というテレビ界の固定観念に、ささやかながら一石を投じるこ

とができたのではないかと思います。

視聴者は、ニュースだからそっぽを向いていたわけではありません。大勢の人たちが私の番組を見てくれるということは、ニュースをわかりやすく解説してほしいという視聴

者の思いに、それまでのテレビが応えていなかったということでしょう。

池上解説は「続基礎英語」

どんなに複雑で難しそうに見えるニュースでも、ひとつひとつを丁寧にひもといていけば、全体像が少しずつ見えてきます。ですから、「よくわからないや」と思考停止してしまうのではなく、私の番組をきっかけに、「ああ、そういうことだったのか」とニュースに興味を持ってほしい。それは、「週刊こどもニュース」のときから変わらず持ち続けている願いです。

さらに、そこから先へ進んで、もっと深く勉強してくれるのであれば、言うことはありません。若い人たちから『週刊こどもニュース』を見て、世の中のことに興味を持つようになりました。「ジャーナリズムの仕事につきました」と言われたりすると、「この仕事をしてきてよかった」と、嬉しい気持ちでいっぱいになります。

言ってみれば、「池上解説」はニュースの「続基礎英語」のようなものです。NHKラジオの英語学習番組は、かつては初めて英語を学ぶ中学一年生レベルの「基礎英語」から

「続基礎英語」に、その後さらに「英会話」「ビジネス英語」へとステップアップしていききました。「週刊こどもニュース」が「基礎英語」だとすると、上級の「英会話」「ビジネス英語」は夜七時や九時のニュースということになるでしょう。そして、その間をつなぐ「続基礎英語」が、ニュースをわかりやすく解説する私の番組というわけです。

テレビだけではありません。街でよく「池上さん、テレビ見えますよ」と声をかけられるのですが、私は、自分の本業はテレビに出てしゃべることではなく、あくまで書くことだと思っています。そんな私が書く本も、やはり「基礎英語」「続基礎英語」のようなもので、あくまで導入と考えてほしいのです。

「基礎英語」だけ聴いていても、本当に初歩の部分を覚えただけで、それで英語ができるようになったとは言えないでしょう。英語を勉強するからには、「基礎英語」や「続基礎英語」で満足するのではなく、「英会話」「ビジネス英語」の難しい英語を学習し、英語の達人を目指したいと思うはずで、それと同じで、ニュースも「基礎英語」「続基礎英語」が理解できたら、その先にどんどん進んでいってほしいと思っています。